

## 「忘れられた1970年代のインターネット」

格差社会の誘引となった新自由主義(市場原理主義)経済がチリではじまったわけ

長野県農業大学校農学部総合農学科教授 吉田太郎

世界初の市場原理主義の実験場「チリ

緑の革命の父とされ、ノーベル平和賞を受賞したノーマン・ボーローグ博士は九十三歳でいまだに健在だが、他にも高齢の天寿をまっとうした二人の人物がいる。一人は、一九七六年にノーベル経済学賞を受賞し、二〇〇六年の十一月に九十四歳で死んだ米国の経済学者、ミルトン・フリードマン(一九二七―二〇〇六)で、もう一人は、その一カ月後の十二月に九十歳で死んだチリの独裁者、アウグスト・ホセ・ラモン・ピノチェト・ウガルテ(一九一五―二〇〇六)だ。経済学者と独裁者。並べるには意外な組合せに思えるが、二人は切っても切れない縁がある。

フリードマンは、自由競争による経済成長モデルを主張した「シカゴ学派」の教祖である。

国営事業の民営化、財政赤字の削減、外資の積極的な導入、貿易や資本取引の自由化、関税の引き下げ、労働市場の柔軟化等いまとなつてはお馴染みの新自由主義政策は、このフリードマンによって作り出された。

だが、今をときめく新自由主義経済学も一九六〇年代に登場した当初は異端の学説にすぎなかった。この亜流の「経済学」が世界を席巻するには、壮大な「社会実験」が必要だった。そして、その舞台となったのもラテンアメリカだったのだ。

チリでは一九七三年にピノチェトが大統領となるが、ピノチェトは、フリードマンの弟子たちを米国から招いて新自由主義経済政策を実施する。その結果、チリはフリードマン自らが「チリの奇跡」と呼ぶほどの経済再生を果た

す。支持者たちは「前政権の失政で混乱した経済を見事に立て直した」と絶賛した。フリードマンは全世界で名声を馳せ、これが後に、古くは一九七九年の英国サッチャー政権と一九八一年の米国レーガン政権、新しくは日本の前小泉政権等が新自由主義経済を導入するきっかけとなつていく。つまり、フリードマンが提唱する規制緩和、国営企業の民営化、金融自由化、行財政改革、教育バウチャー制度の導入等の新自由主義経済を世界に先駆けていち早く実践した「優等生」が、チリのピノチェト政権だったのだ。

むしろ、チリの実験は燦燦たる結果を招いた。一部の大企業や金持ちが儲かる一方、借金を返すのは一般庶民という構図の中で貧富の差が拡大した。贅沢品ブームが起こる一方、一九七

三年には4・3%であった失業率が十年間で22%に上昇。貧困率は前政権時代の倍以上にふくらみ、国民の45%が「極度に貧困」か「貧困」というワーキング・プア状態におかれた。このため、さすがのピノチェト政権もその末期にはシカゴ学派を政権から追い、ケインズ政策を導入し軌道修正を図っている。

つまり、チリは市場原理主義、言い換えれば、新自由主義経済の失敗という貴重な教訓を残してくれたといえるだろう。だが、失敗事例ならばいま世界中にある。ベストセラー『ルポ貧困大国アメリカ』（岩波新書等で指摘されているように、米国も超格差社会になっている。いくら原点であるとはいえ、何も今さらチリに学ぶ必要はない。だが、それを承知であえてここでチリを取りあげたいのは、フリードマンのそれ以上に、人類に取って貴重なモデルとなったかもしれない貴重な実験を世界に先駆けて行っていたからだ。

非効率性から破綻するソ連型の計画経済  
一九七〇年、チリではアジェンデが過半数を獲得し社会主義政権が誕生した。これは、世界

史上初めて選挙を通じて成立した社会主義政権だった。当時、ラテンアメリカではキューバ革命とゲバラのゲリラ戦によって、武装ゲリラ闘争が広がっていたが、アジェンデは「銃なき革命の道」を切り開いたのだ。だが、その民主的な革命への期待は、翌一九七一年には早くも色褪せ始める<sup>(1)</sup>。

その理由のひとつは米国にある。米国にとってアジェンデの登場は衝撃的な事態だった。チリの莫大な鉱物資源や電信電話事業はすべて米国企業の手の中にあつたが、革命政権は各地の工場や鉱山等の国営化を進めはじめていた。このまま放置すれば第二のキューバを招きかねない。当然のことながら米国は激怒した。直ちにチリへの経済制裁を行い、CIAを通じて革命を潰すための様々な工作に着手する。経済封鎖でチリ経済は大打撃を受け、国内で暴発するスト、国有化を望まない企業経営者たちの反対等から経済は大きな危機に瀕した<sup>(2)</sup>。

だが、経済不振の原因は米国だけにあつたわけではない。チリの最も重要な輸出品は銅鉱石で、輸出収入の半分以上を占めていた。だが、新たに国有化された鉱山や工場で完全に稼働

しているものはわずかだった。社会主義の非効率性という弱点が出てしまったのである。

前回、キューバで小規模農家が成功できている最大の理由は、社会主義政策によって農産物価格が担保されているからだ、と述べた。だが、社会主義政策の最大の弱点は、官僚機構の肥大化と「非効率性」にある。この難点はキューバでも克服されていないし、『科学的社会主義』を標榜していたソ連も肥大化した官僚機構の非効率性で崩壊してしまった。そして、計画経済が困難に行き当たることはすでに一九二〇〜三〇年代になされた「社会主義経済計算論争」でも予想されていた。「計算論争」とは、ロシアに出現した社会主義計画経済が今後も存続・発展できるのか、という当時の社会的関心もあつて繰り広げられた論争だ。まず口火を切ったのが、オーストリア出身の経済学者、ルードヴィヒ・フォン・ミーゼスで、その弟子であるフリードリヒ・ハイエクは「原理的に可能であっても、合理的な計算をするには数百万の連立方程式を解かねばならず、実際上は実行不可能だ」と批判してみせた。

フリードマン流の新自由主義の道を選択す

れば、経済効率はよいかも知れないが格差が広がり、ワーキング・プアを産む。片やソ連型の社会主義やケインズ政策を選択すれば、社会保障は保たれるかもしれないが、巨大で非効率な官僚機構に圧迫され財政が破綻する。この二律相反は永久に解き明かせない難題のようにも思える。だが、アジェンダ政権は伝統的な社会主義政権には思いもつかないようなユニークなプロジェクトを立ち上げていた<sup>(1)</sup>。

#### 四六〇〇キロの国土をコンピューター・ネット トで管理

六角形の部屋に備えられた七脚の特殊な回転イス。イスの肘かけのコントロールスイッチは、壁に備え付けられた大型スクリーンを制御し、このスクリーンにはリアルタイムで現場の状況がリポートされる。SF映画を思わせる近未来的なオペレーション・ルーム。

チリの国土は南北に細長い。最南端と最北端とでは四六〇〇kmにも及ぶ。この長大な国土を電子ネットワークでつなぎ、全国土に散らばる各生産設備から日々送られてくるデータを処理し、合理的な生産管理に生かす。アジェン

ダ政権は、このような画期的な実験を行っていた。

このプロジェクトのきっかけを作ったのは、チリ経済開発公社(CORFO)の技術部門の責任者で、当時はまだ二〇代だったフェルナンド・フロレスだった。「中央集権的なソ連モデルは、はじめから反対していました」と後に語るように、フロレスは計画経済にかわる柔軟なマネジメント・システムを模索していた<sup>(2)</sup>。「ソ連モデルが実行不可能なことは直感からわかりました」とフロレスの主席顧問だったラウル・エスパーホも述べている。では、二人はチリ経済をどう運営しようとしていたのだろうか<sup>(1)</sup>。彼らが目を付けていたのが、アンソニー・スタフォード・ピア(一九二六〜二〇〇二)という英国人が考え出したユニークな経営理論だった<sup>(3)</sup>。実は、アジェンダ政権が誕生する以前の一九六〇年代前半にピアの会社が、チリ鉄道の業務に携わっていたが、当時、この仕事にかかわった一人の土木工学を専攻した学生が、ピアの著作を読み、その独創性に魅了され、彼らが中心となってピアのシンパ・グループが国内で形成されていたのである。この学

生こそが、アジェンダ政権の下で財務大臣等各種閣僚を務め、産業国有化の責任者となっていたフロレスだった。

一九七一年七月、フロレスとエスパーホは、ピアにアドバイスを求める手紙を書く。二人はピアが超多忙なことを知っており、弟子の誰かを派遣してくれることを期待した。だが、手紙を受けとったピアは、それ以外の契約を破棄し、自らチリにやってくる。チリ人たちは感動した<sup>(1)</sup>。

#### 走り出すサイバースン・プロジェクト

ピアが代価として要求したのは、日に五百ドルとチョコレート、ワイン、そして、葉巻だった。それは、ピアの通常のコンサル料より安かったが、米ドルが乏しい新政権には決して安い買い物ではなかった<sup>(1)</sup>。だが、ピアは金に見合っただけの期待に応えた。何よりも大統領自身がプロジェクトに熱心だった。ピアは自分の理論を紙に書き約一時間半もかけて説明したが、「経済に電子神経システムを移植する」というアナロジーは、医師でもあったアジェンデには納得のいくものだった。

「大統領はネットワークや組織の生物的な特性の概念を本能的に理解してくれたと感じました」ピアはそう感想をもらしている<sup>(1,3)</sup>。

アジエンデはソ連型の官僚機構は失敗だと考えていた。だから、プロジェクトの目的のひとつは、チリの官僚制度を改善することにあつた<sup>(4)</sup>。こうして、「サイバーシン」、チリでは「シンコ」と呼ばれた計画がフローレスを責任者として始まった<sup>(3)</sup>。サイバースインとは、「サイバネティックス」と「シナジー」とを合成した言葉だ。そのアウトラインは、わずか八日で作り出された。

「われわれのグループは、八日間休みもなく疲労困憊するまで働いたものです」

後にピアはこう書いている<sup>(4)</sup>。

チリよりも金銭的に豊かで政情が安定した国であっても、新たな制度を構築するには最低半年は必要であろう。だが、プロジェクト・チームは前政権が購入したものの、使うあてもないままに放置していた五百台のテレックス・マシンを倉庫で見つけ出す。技術的な障害は解決された。テレックスが各工場に配布され、首都サンティアゴにある二部屋のコントロー・ル

ームにつながれた。ルームのスタッフは、毎日夕方五時に経済データを集め、一台しかない貴重なコンピュータをフル回転させて大統領官邸に、日々状況を報告した<sup>(1)</sup>。チリ経済は混乱し続け、システムが作業現場にすぐ受け入れられたわけではなかった。だが、配付されたテレックスを使えばどの各作業現場でもサンティアゴと同じデータが見ることができたことから、現場も次第にその重要性を理解していく<sup>(3)</sup>。

#### サイバネティックス生命理論

今となつては、インターネットによる電子情報ネットワークも、コンピュータも取り立てて珍しいものではない。だが、今から三〇年以上も前に、国家経済をコンピュータの司令塔をベースに管理しようというのは尋常な発想ではない。ピアはどうしてこのようなユニークなシステムを着想したのだろうか。

ピアは、もともと軍人だった。十八歳の時にはインド駐留部隊に所属し日本軍侵入に備えていた。大戦後も軍の参謀、情報将校として「オペレーションズ・リサーチ」の業務に従事することになる。だが、ピアはこの「オペレー

ションズ・リサーチ」がビジネスにも応用できることにすぐに気づいた。軍役を終えるとピアは、サムエル・フォックス社に入社し、その後は親会社ユニテッド・ステイール社に移籍し、そこに十三年在籍することになる。ピアは、同社の幹部にオペレーション・リサーチとサイバネティックス・グループを設立するよう持ちかけ、その説得に成功し、七〇人以上の専門スタッフのリーダーとなる。

サイバネティックスとは、エンジニアたちの間で評判を呼んだ米国の天才数学者ノーバート・ウィナーが提唱したまったく新たなシステム理論である。だが、まもなく、この理論が工学だけでなく、人間の神経系や社会全体にまで適用できることがわかり、生物物理学、統計力学等あらゆる科学技術や経済学に大きな影響を与えた。

ピアは、このウィナーをはじめとするサイバネティックスのバイオニアたちとも親しかった。一九五九年には処女作「サイバネティックスとマネジメント」を出版するが、ウィナーは、ピアのことを「マネジメント・サイバネティックス」の父と絶賛した。

ホタル、ミドリムシ、ミジンコ等の池の生態系で実験をしてその機能を調べ神経心理学のモデル研究を進めたり、電子出版やホログラフの研究を手がけたり、遠隔地でも商業活動ができる国際データ・ハイウェイ・グループを確立する等、ビアは独創性豊かな人物だった。多くの本を読み、多くの人々と出会い、着想を得ては考え独学する。

「Carinante no hay canino Se hace canino al andar」(前に道なし。されど、歩まば、道は作られぬ)

ビアが愛し口ずさんでいたのはスペインの詩人、アントニオ・マチャドのこんな詩だった<sup>(2)</sup>。

生物学を手がかりに経営システムや経済を捉えるという、異質な発想のように思える。だが、そもそも経済が生命システムの中で動いている以上、それは当然のことといえる。近代経済学の創始者マーシャルも、経済学は物理学の分野との結びつきではなく、むしろ生物学の一分野であると解釈される<sup>(3)</sup>と主張している。生命としての経済学。ビアは、組織も生物と同じだとし、人間の頭脳、脳・神経システムに着

想を得て、組織の階層モデルも考え出した<sup>(2)</sup>。

だが、当時としてはあまりに時代を先んじ、かつ、独創性にあふれていたため、ビジネス界であれ、政治家であれ、ビアのクライアントたちは、ビアが望むほどにはそのアイデアを取り入れようとはしなかった。ビアの技術はもともとは英国の製鉄業向けに開発されたものだったが、国内よりも海外からの相談が多くなる<sup>(1)</sup>。そこで、ビアは一九七〇年に世界を相手にコンサルタントとして独立して働くことを決意するが<sup>(2)</sup>、自分の理論を金持ちたちの金儲けの道具には使いたくはなかった。そこに、アジェンデから声がかかったのである。

#### 食料危機を切り抜ける

一九七二年八月、アジェンデ政権は最大の危機に直面した。CIAの秘密工作で保守的な業界がストライキを始めたのだ。五万人のトラック運転手がストに参加し、サンティアゴの通りが封鎖されたため食料と燃料を含め、市内への物流が完全に滞った<sup>(3)</sup>。だが、ここでサイバースインは威力を発揮する。テレックスを用いて、どの地区でモノが最も不足し、どこに協力的な

人々がいるのかの情報が入手できたのだ。サンティアゴのコントロール・ルームには昼夜、スタッフが詰め、大臣でさえそこで眠った。「ルームはまさに本物でした。まるで、宇宙センターにいるようでした」とエスペホは想起している<sup>(1)</sup>。政権は政府に協力的な残りの約二百台のトラックを活用し、市内への食料輸送を確保した<sup>(3)</sup>。米国は、アジェンデ政権を倒すことに失敗した。

だが、これがサイバースインの花盛りだった。米国へのアジェンデ政権への攻撃は、さらに激しくなり、米国からの圧力で他国が援助や投資を断ち切りはじめたため、経済は窒息し始めた。「とてもストレスが多く、いつ辞めようと思っただかしのれない」。一九七三年六月、ビアは、首都サンティアゴを去るようアドバイスを受け、エスペホの親戚から海岸に隠れ家を借りた。そこで、ビアは海を眺め、執筆活動を行い、あるいは、闇に乗じて政府との会議にでたりした<sup>(1)</sup>。

世界をかえる分岐となった9・11

経済が低迷していたにもかかわらず、アジェンデ政権は、一九七三年頭の選挙でその票数を

43%も増やした。国民はまだアジエンデを支持していた。同年九月一〇日には、大統領官邸の一室で測量検査が行われる。最新版にアップ・デートしたサイバーシンをオペレーション・ルームに設置するためだった<sup>(2)</sup>。

だが、運命の日、9・11がやってくる。このテストのまさに翌日、CIAの支援を受けたピノチェト将軍が軍事クーデターを引き起こし、官邸は爆撃を受け、銃撃戦の舞台となったのだ。

ピアは、その日、チリ政府のためにロンドンでロビー活動を行っていた。そして、最後の会合を終えて新聞を読むと、そこには、こう書かれていた。「アジエンデ暗殺さる」。

より正確には自殺だった。アジエンデは、あ  
る一人の親友から贈られたライフルを手  
に自ら命を断っていた。その金製プレートには、私の  
良き友人、サルバドール・アジエンデ君へ、  
フィデル・カストロ」との銘が刻まれていた。  
ピノチェトは、クーデターの即日、キューバ  
との国交を断絶した。社会主義国側も対抗して、  
次々とチリとの断交に踏み切った。そして、ピ  
ノチェトはアジエンデ派の一扫を図る。三千

人以上が殺されたり、拷問を受けた。その中にはピアの友人もいた。エスぺホはうまく逃亡したが、アジエンデとともに官邸に立てこもったフロレスは、投降後、生命の危険に晒されながら強制収容所に政治犯として投獄された<sup>(1)</sup>。

ピアは深い心の痛手を受けた。以前の同僚たちが安全な海外でポストに就けるよう一年間尽力した後に、ピアは私財のほとんどを捨てて、家族とともに中部ウエールズの二部屋だけしかない石づくりのコテージに移りすむ。電気は通じていたが、水道、電話、セントラル・ヒーティングすらなかった<sup>(2)</sup>。

サイバーシンは、一日遅れではあったが、国有産業の75%もの経済情報を管理し、チリ経済の四分の一から半分にも影響していた。当時、一部の外国メディアはピアのことを、「ビッグ・ブラザー型の制度構築に手を貸している」と非難した。ビックブラザーとは、ジョージ・オーウェルが未来小説『1984年』で描いた監視コンピュータシステムのことだ。だが、それはピアの本意ではなかった。ピアはシステムが地方分権的で労働者参加型の非官僚主義的なものとして機能すると信じていた。実際、有権

者、職場、政府が、新たな対話的な全国通信ネットワークによって結びつけられることも計画されていた。それは、政府と国民とをより深くより平等に結び、一種の「社会主義インターネット」とも呼べるものだった。

ちなみに、現在の日本ではサイバーシンのほぼ同じ技術が既に実用化されている。あまりに身近すぎるため気が付かないが、バーコードを利用するコンビニの販売時点情報管理がそれなのだ。コンビニの流通管理システムは、技術的にはサイバーシンのほとんど変わらない。だが、当時はサイバーシンの意味を誰も理解できなかったし、ピノチェトらには、サイバーシンのオープンで、平等主義的な面も気に食わないものだった。クーデター軍は、エスぺホら呼びつけてシステムの内容を聞いた後にオペレーション・ルームを破壊している<sup>(1)</sup>。

ピノチェトはその後も長く軍事独裁政治を敷き、チリの人々を苦しめ続けたが、米国は見えぬ振りを続けた。そして、東西冷戦が終結し「中南米における社会主義の防波堤」としての利用価値が無くなると用済みとして捨てた。ピノチェトは一九九〇年に大統領を辞任し、二

〇〇六年二月一日に死ぬ。皮肉なことに死去した日は国際人権デーだった。

一方、フリードマンは、ベストセラーを出し、ノーベル賞を受賞し、サンフランシスコに建てた豪邸で栄光に包まれながら死んだ。フリードマンはクーデター以前からチリと関わっていた。フリードマンがアジエンデの政策を快く思っていないことは間違いない。極端に言えば、アジエンデはフリードマン・モデルを実現するために抹殺されたとも言えるだろう。<sup>9</sup>「11」はまさに歴史を変えた「分岐点」となったのだ。二〇〇二年にフリードマンは、ブツシュ大統領からホワイトハウスに招待され、長寿とその自由主義経済の普及の貢献をねぎらわれたが、その年にピアも静かに息を引き取っている。

「父には、生き残ったものとしての罪悪感にさいなまれていました」と、息子のサイモンは語っているように晩年のピアは、孤独な詩作や絵画の作成に集中し、宗教上の研究や瞑想に打ち込む簡素な生活をおくったという。

一国の経済を生命理論に基づいて管理する。こんなことは以前に試みられたこともなかった。

だが、それ以降も試みられていない。「社会主義のインターネット」とも形容されるこのユー・トピア的な試みは永久に忘れ去られたのである<sup>(1)</sup>。

#### 【参考文献】

- (1)Andy Beckett: The forgotten story of Chile's 'socialist internet, The Guardian, September8, 2003.
- (2)STAFFORD BEER
- (3)ウィキペディア・サイバーシン
- (4)Leonid Ototsky, Lessons of Stafford Beer
- (5)太田昌国「暴力批判論」, 太田出版、2007.
- (6)西山賢一「免疫ネットワークの時代」, NHK出版 P162,1995.

#### 【固有名詞】

サイバーシン(Cybersyn)

サイバネティックス (cybernetics)

シナジー (synergy)

サイバネティックスとマネジメント(Cybernetics and Management)

#### 【人名】

ミルトン・フリードマン(Milton Friedman)

アウグスト・ホセ・ラモン・ピノチェト・ウガルテ(Augusto José Ramón Pinochet Ugarte)

フェルナンド・フローレス(Carlos Fernando Flores Labra)

ラウル・エスペーホ(Raúl Espejo)

アンソニー・スタッフォード・ビア(Anthony Stafford Beer)

ミュエル・フォックス(Samuel Fox)

ユナイテッド・スチール(United Steel)

ノーバート・ウィーナー(Norbert Wiener)

アントニオ・マチャド(Antonio Machado)

ルードヴィヒ・フォン・ミーゼス(Ludwig von Mises)